

# 子ども・子育て新システム検討会議 作業グループ（ヒアリング）開催状況

平成22年4月27日現在

	月 日	ヒアリング対象
第1回	3月11日（木）	<b>【有識者】</b> ○大日向 雅美（恵泉女学園大学教授） ○駒村 康平（慶応義塾大学教授） ○無藤 隆（白梅学園大学教授）
第2回	3月17日（水）	<b>【有識者】</b> ○秋田 喜代美（東京大学大学院教授） ○小西 砂千夫（関西学院大学大学院教授） <b>【保護者関係】</b> ○普光院 亜紀（保育園を考える親の会代表）
第3回	3月29日（月）	<b>【保育関係団体】</b> ○全国私立保育園連盟 ○全国保育協議会 ○全国認定こども園協会
第4回	4月 1日（木）	<b>【幼稚園関係団体】</b> ○全日本私立幼稚園連合会 ○全国国公立幼稚園長会 <b>【放課後児童対策・地域子育て支援（NPO）】</b> ○全国学童保育連絡協議会 ○子育てひろば全国連絡協議会（奥山 千鶴子 理事長） <b>【民間保育事業者】</b> ○（株）ＪＰホールディングス（山口 洋 代表取締役）
第5回	4月 7日（水）	<b>【保育関係団体】</b> ○日本保育協会 <b>【労使関係団体】</b> ○日本経済団体連合会 ○日本商工会議所 ○日本労働組合総連合会
第6回	4月15日（木）	<b>【有識者】</b> ○宮本 太郎（北海道大学教授） <b>【地方関係団体】</b> ○全国知事会 ○全国市長会 ○全国町村会

作業グループ・ヒアリングの概要（未定稿）

平成22年4月27日現在

〈敬称略〉・〈文責：内閣府〉

【有識者】

有識者名	幼保一体化等	サービス・給付体系	制度体系（国と地方、財政等）
○秋田 喜代美  （東京大学大学院教授）	<b>＜幼保一体化＞</b> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 国際的な動向をみても、行政所管上の幼保一体化が増加傾向にある。幼児教育の重視、保育の質の向上が統合の動きの背景にあるほか、いずれの国においても、小学校以上のカリキュラムとの一貫性・連続性がその射程に置かれている。</li><li>○ 幼保のカリキュラムの統一化は進んでいるが、今後、子どものための質的な保障を実現するために、人員の配置基準、施設基準、合同研修等の実施、養成における資格併有が一層必要である。</li><li>○ どの子どもも、ナショナルミニマムが遵守された一定の質の保育が、国や地域や家庭の格差なく保障されることが求められるが、歴史的・地域的に培ってきた子育てや保育の文化が尊重されていくことが望まれる。</li></ul>	<b>＜保育の質の保障＞</b> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 待機児童対策が質を下げる方向に向かつてはならない。10年後、20年後に悪影響を及ぼす。</li><li>○ 保育の質の保障とは、養護と教育の不断の質の確保と改善過程にある。子どもの最善の利益を考慮し、子どものくらし、遊び、学びの質を保障することである。これは、経済格差による子どもへの影響の是正にもつながる。</li><li>○ そのためには、保育実施のための施設等の最低基準の保障、保育者の高度専門性の育成、ナショナルカリキュラムの遵守、園の自立的自己評価により、一定以上の養護と教育の質的保障を行う公的な統合システム形成が必要。</li></ul>	<b>＜国と地方の役割等＞</b> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 教育と保育は、国が責任をもって最低基準を設定することが重要であり、OECDの中でも国が子どもに責任をもたずに地方に完全に任せているところはない。</li><li>○ 「幼児期」だけを切り離して議論するのではなく、18歳までの子どもという連続性と連携の視点が重要である。</li></ul>
○大日向 雅美  （恵泉女学園大学教授）	<b>＜子ども家庭省（仮称）＞</b> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 「子ども家庭省（仮称）」については、福祉の問題全体、社会保障全体の問題、労働政策全体の問題から考えていく必要があるのではないかな。</li></ul>	<b>＜幼児教育の意義等＞</b> <ul style="list-style-type: none"><li>○ OECD各国とも、幼児期の教育・保育に投資をしており、就学前の教育保育が子どもの生涯にわたる人間形成の基礎となることを踏まえ、親の多様な生活スタイルのニーズに応えることを前提としつつ、子どもの観点に立って、より良い子どもの育ちを保障しようとする努力が必要。</li><li>○ 養育力の低い家庭の子どもには、質の良い保育を提供することで、格差を是正し、発達の補完することが可能。</li></ul> <b>＜保育の質の保障＞</b> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 保育の量を拡大することは喫緊の課題であるが、質の担保を前提とする必要があり、安易な規制緩和は日本の未来を危うくする。</li><li>○ 子どもの貧困が問題となっている日本において、質のよい保育の提供は、発達の補完の意味からも大切。</li><li>○ 保育の質とは、保育者の応答性であり、大人の良い働きかけが子どもの育ちに良い影響を与える。したがって、職員配置の向上、保育士等の処遇の向上、専門性の向上が必要である。</li></ul>	<b>＜国と地方の役割＞</b> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 子どもの発達保障に関して、国および市町村がしっかり関与し、「未来への投資」として、公的責任を果たすことが肝要である。</li></ul> <b>＜子育て支援策等の重要性＞</b> <ul style="list-style-type: none"><li>○ ビジョンにあるように、①社会全体で子育てを支えるということ、②仕事と生活の調和が図られることにより、出生率の向上と女性の労働力向上による経済成長を同時に達成することが重要課題。</li><li>○ 女性の労働者が安心して働きつづけるためにも、保育制度改革が必要。</li><li>○ 働き方の多様化に対応したサービスの多様化が必要であり、市町村の責務の下での利用者と事業者の公的保育契約、潜在需要も含め保育を必要とするすべての子どもに例外のない公的保育を保障する必要がある。そのために国・市町村の公的責任により良質な保育を提供してほしい。そのために、保育改革をはじめ、現物給付に財源を重点的に投入すべき。</li></ul>
○小西 砂千夫  （関西学院大学大学院教授）		<b>＜子ども・子育て政策の充実強化＞</b> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 子育て支援サービスのための制度を大胆に改革し、利用者へ例外なくサービスを保障する、サービス選択可能な仕組み、事業者の参入促進などの基本的方向性については賛同する。</li><li>○ 次代の社会を担う子ども1人ひとりの育ちを社会全体で応援する「子育て社会化」や、多様な保育サービスを基礎的自治体が担うという方向性は重要。</li></ul>	<b>＜地域主権と保育サービス＞</b> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 「地域主権」の観点からは、全国一律で裁量の余地のない現金給付的なものは国が負担し、地域のニーズに応じた提供がなされるべき現物給付的なものは、主として地方の負担とする考え方が基本となる。</li><li>○ 地方が行うべきサービスは、義務付け・枠付け等の縛りを廃し、地方がそれぞれの地域のニーズに的確に対応できるようにすることが、地域主権改革の方向性に適うもの。</li><li>○ 私立保育所の運営費国庫負担を一般財源化（地方財政計画の歳出にきちんと位置付ける）し、保育所の運営・設備基準についても地方が決定できるように緩和し、国の関与は事後的なチェック（クオリティ・コントロール）で対応する方向が望ましい。</li></ul>

【有識者】			
有識者名	幼保一体化等	サービス・給付体系	制度体系（国と地方、財政等）
○駒村 康平  （慶応義塾大学教授）	<b>＜幼保一体化等＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「一人働き社会」から「共働き社会」への移行への対応として、現在は棲み分けしている保育所と幼稚園のミスマッチを解消し、「幼保一体化」を図ることが重要である。</li> <li>○ 育児休業と保育サービスとの連携を進めるとともに、幼保を一体化し、3歳未満は要保育度に応じて保育サービス利用と幼稚園参入、3―5歳は保育所か午後の保育サービス付き幼稚園を選択する仕組みを提案する。</li> </ul>	<b>＜新しい社会システム＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 効率（成長）と公平（再配分）を同時に高める政策を行うことが必要であり、「保育制度改革（待機児童解消）」「教育政策（就学前教育）」「労働政策（両立支援策）」「所得保障政策（子ども手当）」とをバランスよく進めることが必要である。</li> <li>○ 保育サービスについて、「規制緩和を行い市場メカニズムにゆだねればよい」との主張については、情報の不完全性やサービスの質（アウトプット）が測定できない現状では成り立たない。一定の公的コントロール下で多様なメニューを導入し、多様な主体の参入をみとめる「準市場メカニズム（契約・選択・参入）」が必要。</li> </ul>	<b>＜国と地方の役割＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「保育サービスは地方に委ねるべき」との主張については、保育サービスと労働政策との連携、社会保障制度を持続可能にする人口問題という長期の国家戦略という観点から問題がある。国は、市町村に保育サービスの充実のために確実に使われる財源（「子ども」の「色」のついた財政支援）を保障することが必要。</li> <li>○ 特別の「基金」をつくって、企業負担、労働者の負担、国、地方の負担を入れて、個人には育児休業もしくは保育サービスを選択してもらい、自治体にはその他の子育て支援サービスと現金給付とを選択してもらうような仕組みがよいのではないか。</li> </ul>
○宮本 太郎  （北海道大学教授）	<b>＜幼保一体化等＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ スウェーデンでは就学前教育の重要性が浮上し、1996年に保育を教育庁の所管（幼保一元化）としたが、その主体は「自治体」であることに留意すべきである。</li> </ul> <b>＜子ども家庭省（仮称）＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 切れ目ない生涯教育の土台としての就学前教育という位置づけから見ると、「子ども家庭省（仮称）」という括り方は、幼保一元化をスムーズに進めるかもしれないが、生涯教育という観点からは切れ目が生じてしまう。わが国では一方通行型教育の見直しをまず進めるべき。</li> </ul>	<b>＜就学前教育の意義＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 就学前教育は、知識社会への対応、高齢社会への対応、格差社会への対応、共同参画社会への対応、孤立社会（無縁社会）への対応などの観点から重要である。</li> </ul> <b>＜保育制度改革等＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 就学前教育のユニバーサル化の流れを踏まえれば、「保育に欠く」要件は見直されるべき。</li> <li>○ スウェーデンでは行政が一律的な基準の保育・教育サービスを行い、保護者の多様なニーズに応える形で協同組合等の「新しい公共」部門が保育・教育サービスを行っているが、費用や公的負担についてはイコールフットリングとなっている。</li> </ul>	<b>＜わが国の家族政策＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ わが国の家族政策は、雇用を軸とした生活保障という面では間違っていなかったが、男性雇用志向に偏ってきたため、子ども・子育て支援が私的な問題として扱われる傾向が強かった。</li> <li>○ 子ども手当は、保育サービス・就労支援サービスと併せてバランスよく提供されなければ、わが国は男性雇用志向型かつ雇用保障への政府関与が弱い「一般家族支援型システム」（旧ドイツ型）へ近づいてしまう。</li> <li>○ 家族政策への支出が大きく、有償労働の女性への開放度の高いスウェーデン型の「両性支援型システム」を前提に就学前教育の充実をするべきではないか。</li> <li>○ 両性支援型システムにおける「子ども中心の社会的投資戦略」はむしろ家族の結びつきを強める。</li> <li>○ スウェーデンで高福祉、高負担が成り立つのは、サービスが納税の主体である中間層が納得できるに足る所得比例保障であるため。子どもを持つには働いてある程度の収入の保障を得ることが必要となり、結果として女性の社会進出を促すことにもつながっている。</li> </ul>
○無藤 隆  （白梅学園大学教授）	<b>＜幼保一体化＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「幼保一体化」は3つの意味で必要である。①地域の子どもとして生活をともにする場が必要であること、②小学校への連携・接続が求められていること、③就園前の段階から保護者への支援がはじまること。</li> <li>○ 幼保一体化の試行としての認定こども園は、幼保の伝統は互いに異なるものの、新たな統合的な保育の在り方が生まれてきており、保護者の評判も高い。この取組みを全国展開していく必要があるが、会計処理等の簡便化や利用者負担の公平、補助の在り方などの課題がある。</li> </ul>	<b>＜保育の質と幼児教育の意義＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 保育サービスの質は、養護と教育の2つの面で確保されるべきであり、専門性の高い保育者が必要である。</li> <li>○ 幼児教育施設は、一定水準の幼児期の教育を確保することによって、家庭教育の格差を補うものとして意義がある。</li> <li>○ 小学校教育の基盤をつくる上で、幼児教育は重要であり、小学校教育との連携が必要である。</li> </ul>	

【保護者関係】			
有識者名	幼保一体化等	サービス・給付体系	制度体系（国と地方、財政等）
○普光院 亜紀  （保育園を考える親の会代表）	<b>＜幼保一体化等＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 認定こども園については、看板だけで質を担保する仕組がなにもないものもある。一人ひとりの子どもや家庭の状況が違い、暮らしも価値観も多様化している中で、多様なニーズに応えることこそ必要であり、何のための「一体化」なのかということを明確にする必要がある。</li> <li>○ 「一体化」の姿というものは、決してどこの施設でも全く同じことをやるということではなく、幼稚園的な保育もあれば、保育所的な保育もある。保育所と幼稚園は、異なるニーズに対応し、異なる役割を担ってきたところであり、保育所・幼稚園のそれぞれの良さを失わせない仕組が必要。無理やり一体化すべきではない。</li> </ul>	<b>＜保育所機能の意義＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 子どものセーフティネットとしての福祉ニーズに対応する保育所機能は地域にくまなく存在する必要がある。在宅子育て支援機能は、幼保の取組み支援のほか、多様な担い手も支える必要がある。就学前教育においては、子どもの平等を確保する必要がある。</li> <li>○ 保育制度改革については、「応益負担」では中間所得層の負担が重くなるおそれがある。「指定制」はビル保育の激増につながりかねない。営利制限や人材確保の仕組み、情報開示が必要。</li> </ul>	<b>＜財源の確保＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 待機児童対策は、面積基準緩和などの小手先の対策ではなく、子どもにとって望ましい環境（子どもの権利条約）を増やす対策が必要であり、そのためには財源の確保（施設整備・運営費）が必要。</li> <li>○ 保育所運営費の一般財源化は、待機児童対策にもマイナスの影響がある。</li> </ul>

【保育関係団体】			
団体名	幼保一体化等	サービス・給付体系	制度体系（国と地方、財政等）
○全国私立保育園連盟	<b>＜幼保一体化等＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 乳幼児期からの子どもの発達の切れ目のない連続性を保障（3歳以上と3歳未満で分離すべきではない）する新たな保育・子育てシステムと「幼・保一体化」が求められる。</li> <li>○ 「幼保一体化」構想については、①すべての子どもを対象とし、差別・区別が生ずる制度設計ではないこと、②行政の一体化が必要であること、③保育と教育にはすでに確立された“共通性”があること、に留意が必要である。</li> <li>○ ナショナルミニマムや基準を差別化しない形で制度設計した上でなら、多様な選択肢や、幼稚園・保育所のそれぞれの伝統をもったやり方があってよい。</li> </ul>	<b>＜保育制度改革＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 児童福祉法に基づき、すべての子どもと家庭が「いつでも、どこでも、だれでも」受けられるより豊かな子育て支援と保育・教育政策の確立が重要である。</li> <li>○ 保育・福祉事業への「企業の過度の参入」による市場原理・市場競争の行き過ぎと利益優先型の事業の拡大や格差を広げる制度設計は避けるべき。</li> <li>○ 児童権利条約に定められる「子どもの最善の利益」に沿った保育と「環境及び質」の向上に努めることが必要である。</li> </ul>	<b>＜国と地方の役割等＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 児童福祉法を尊重し、国と市町村の役割と責任を明確にした制度とすることが求められる。</li> <li>○ 将来に向けて、「国・自治体・事業主・保護者」の社会全体で子どもの育ちと子育てを支える新たな財源制度の確立が必要である。</li> <li>○ 「生命と育ち」「保育と教育」を保障する児童福祉施設最低基準（ナショナルミニマム）を国・市町村において遵守することが必要である。</li> <li>○ 家庭的保育、一時保育、地域子育て支援拠点、育児休業手当の充実をはじめとしたワーク・ライフ・バランスの推進を総合的に進めることが必要である。</li> </ul>
○全国保育協議会	<b>＜幼保一体化＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「幼保一体化」とは何を意味するのかを明確にするとともに、保育所と幼稚園の各制度の特性と役割、運営実態を検証して、慎重に議論する必要がある。</li> <li>○ 子どもが育ち生活する場は多様であり、機能に応じて様々な施設があって良い。</li> </ul>	<b>＜保育制度改革等＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 新たな保育制度においては、利用者・事業者・地方自治体、三者の「公的保育契約」の位置付けと法的根拠を明らかにする必要がある。</li> <li>○ 「指定制」の仕組と事業主体の属性などによる規制を明らかにする必要がある。</li> <li>○ 新たな保育制度の運営費等の使途と制限を明らかにする必要がある、株式会社が配当することには反対。</li> <li>○ 児童福祉施設である認可保育所の社会的使命、役割（養護と教育、保護者支援、地域子育て支援）を明らかにする必要がある。</li> <li>○ 「食えることは生きること」であり、健康と育ちを守る保育所における食育の重要性を認識すべきである（給食の外部搬入については反対）。</li> </ul>	<b>＜国と地方の役割＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 安心と成長という視点から、国がその責任のもとに新たな保育・子育て家庭福祉政策の確立を図り、そのための財源を確保することが必要である。</li> <li>○ 新たな保育・子育て家庭福祉制度における地方自治体の実施責務を明らかにすべきである。</li> </ul>
○日本保育協会	<b>＜幼保一体化＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 幼保一体化については、幼稚園及び保育所の両制度を核としながら、まずは現行の認定こども園制度の改善を含めて制度改革を図るべきであり、一律的に一元化することは、逆に利用者のニーズに応えられない。また、3歳未満は保育所で、3歳以上を幼稚園でというのは乱暴な議論である。</li> <li>○ 「幼保一体化」の中身は何なのか、不明な部分が多く判断できない。また、幼稚園で0－2歳児を受け入れることができるのか疑問である。</li> </ul>	<b>＜保育制度改革等＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 保育所は福祉施設として、家庭に代わる子どもの生活と学びの場であり、この視点は維持すべきである。そのため、市町村が関与した入所のしくみとし、公定価格が必要であり、競争原理が働く仕組みは適当ではない。</li> <li>○ 保育所は地域のすべての子育て家庭を支援する役割・機能を充実強化し、子どもにも保護者にも使いやすい仕組みになっていくことが大事である。</li> <li>○ 世界の中で最低レベルの保育所最低基準を引き上げることが必要。また、待機児童解消のみを目的とした指定制の導入は保育の質の低下につながるものである。</li> <li>○ 保育の質の向上のためには、保育士の配置基準と処遇の改善が必要である。</li> </ul>	<b>＜財源の確保等＞</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 子ども・子育て新システムの構築に当たっては、国及び地方公共団体の責任の強化が必要であり、保育所の待機児童の解消のために、国及び地方公共団体が大幅に財源を投入し、保育所の整備を促進すべきである。その財源は社会全体で費用負担する形で確保する。</li> <li>○ 保育所運営費の一般財源化には反対。</li> <li>○ 就学前の子どもの教育・保育については、都市部では待機児童の解消、地方では少子化による子どもの減少への対応と、地域に応じた取組が求められるため、柔軟な対応を可能とすることが求められる。</li> </ul>

【保育関係団体】

団体名	幼保一体化等	サービス・給付体系	制度体系（国と地方、財政等）
○全国認定こども園協会	<p>＜認定こども園＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「認定こども園」は、幼稚園機能、保育所機能、子育て支援機能の3つの機能を総合的に生かしていける施設である。</li> <li>○ 各地域で好事例となる取組みが行われているが、会計基準の違い、法人制度の違い、財政措置の違い、地方行政所管の違い、最低基準の違いなどの現行制度上の運用ラインの限界（二重行政の歪み）もある。財政的支援の不足が普及していない大きな要因である。</li> <li>○ すべての子どもたち（保育所、幼稚園、長時間、短時間、狭間にいる子供たち等）の最善の利益のために、ユニバーサル・サービスとワンストップ・サービスを目指し、子どもの教育、保育、生活の質を確保する必要がある。</li> <li>○ 子ども環境（家庭・地域社会）機能の再生・回復が必要であり、地域の活性化、地域の質を高めていくことがこれからの課題である。</li> </ul>		

【幼稚園関係団体】

団体名	幼保一体化等	サービス・給付体系	制度体系（国と地方、財政等）
○全日本私立幼稚園連合会	<p>＜幼保一体化等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 私立幼稚園が「認定こども園」の申請をしても市町村窓口で受け付けられなかったり、補助を受けられないなどの課題がある。</li> <li>○ 私立幼稚園は、待機児童解消のために、その施設を開放する用意があるが、地域の実情や、保護者の要請などに応じた柔軟な制度設計が必要であり、全国一律に制度を統一すべきではない。</li> <li>○ 幼稚園の「地域の子育て・教育」のセンターとしての機能が壊されることがあってはならず、幼稚園と小学校との連続にも留意すべきである。</li> </ul>	<p>＜幼児教育の意義＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ すべての子どもには良質な教育を受ける権利があり、教育に軸足を置いた国家戦略として、子どもにとって豊かな環境を保証すべき。また、子育てを通じて親が成長する。</li> <li>○ 国家戦略として、OECD諸国並みの教育投資が重要である。</li> <li>○ 「幼児教育」の基本部分（コア）は、3歳児から5歳児までの1日4時間程度を標準として、すべての子どもに幼稚園教育要領に準拠した教育が実施されなければならない。</li> <li>○ 保育に欠ける場合であっても8時間を限度とし、制度としての「教育・保育」「子育て」「就労支援」をあらためて整理し、公平な助成制度を確立する必要がある。</li> </ul>	
○全国国公立幼稚園長会	<p>＜幼保一体化等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 幼保一体化については、地域によって幼稚園・保育所の設置状況が異なることを踏まえて、認定こども園（とくに幼保連携型）において保育及び教育を充実する必要がある。</li> <li>○ 多様化する幼児教育施設の中で、幼稚園・保育所・認定こども園いずれの施設でも確実に教育が行われるような仕組みとし、保護者が選択できることが重要。</li> <li>○ 「小1問題」に対応し、幼児教育と小学校教育の接続が重要である。</li> </ul>	<p>＜幼児教育の意義＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「幼児教育」は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、3歳からの集団の中での豊かな学びと、専門性の高い教員が必要。</li> <li>○ 子育ての現状は、地域格差、経済格差、子どもの育ちの危機、子育てに悩む母親の増加、保護者の学びの機会の欠如などの課題があるが、次代を担う人づくりの根本的な対策として、子どもの育ちの視点から考える必要がある。</li> <li>○ 幼稚園、保育所に通う親子には様々な考え方や価値観があるが、子育て家庭が地域社会づくりにかかわっていくことが重要である。</li> </ul>	

【放課後児童対策・地域子育て支援（NPO）】

団体名	幼保一体化等	サービス・給付体系	制度体系（国と地方、財政等）
○全国学童保育連絡協議会		<p>＜学童保育の意義＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「学童保育」は、共働き・ひとり親家庭の小学生（主に低学年）の子どもたちに、家庭に代わる「毎日の生活の場」を保障する施設であり、「毎日の継続した生活保障」と「安全で安心できる生活の保障（指導員と子ども、子ども同士の継続した人間関係）」が必要である。</li> </ul> <p>＜学童保育の充実＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「学童保育」に関する市町村の実施責任を強化すると同時に、最低基準をつくり、その基準に沿って質的向上が図られるよう、国としての財政措置をしっかりと行うことが、「量的」「質的」な拡充につながる。</li> <li>○ とりわけ、指導員が安心して働き続けられ、安定的に確保されるためには、公的な資格制度を創設し、養成機関を整備することが必要である。</li> <li>○ 「生活の拠点」と「遊び場・居場所」を区別する観点から、全児童対策事業との一体的運営には反対する。</li> </ul>	
○子育てひろば全国連絡協議会 （奥山 千鶴子 理事長）		<p>＜地域の子育て支援の意義＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 3歳未満の子どもたちのサポートは、親も入れた家庭支援という考え方が重要である。他方、3歳以上は、幼稚園・保育所を軸とした基本8時間保育、学びの場と養育の場の実現を目指す。</li> <li>○ 親が働いていない家庭であっても、家庭内ケアには限界があるため、一定のサービスの提供が必要である。</li> <li>○ 子ども・家庭施策の政策目的は、「①子どもの健やかな育ち」「②親のエンパワーメント」「③両立支援」「④地域力の向上」。</li> </ul>	<p>＜子育て支援制度のあり方＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地域子育て支援については、地域事情に応じたサービスの創出と提供が可能な「子育て支援NPO」などを活用すべきである。</li> <li>○ フランスの「家族手当金庫」のように、子育て家庭や支援団体、企業など多様な関係者が参画し、議論する場が必要である。</li> </ul>

【民間保育事業者】

団体名	幼保一体化等	サービス・給付体系	制度体系（国と地方、財政等）
○(株)JPホールディングス （山口 洋 代表取締役）		<p>＜保育制度改革と民間参入＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 保育サービスへの「多様な経営主体の参入」により、多様な保育ニーズへの対応が可能になるとともに、大規模な組織をもつ株式会社などの資源を活用することにより、スピード感のある拡充が可能となる。</li> <li>○ また、大規模な事業体の参入により、研修システムや福利厚生による職員の質の向上や処遇向上が可能となる。</li> <li>○ 保育サービスへの参入障壁としては、「①地方自治体による差別的な取扱い（既得権益団体などの圧力）」「②社会福祉会計の事務労力」「③株式会社が配当を制限される場合がある」「④運営費の用途制限があり余剰金が活用できない」等の課題がある。</li> </ul>	<p>＜地方の役割等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「地方分権」はよいが、地方の利権を残したままでは改善しない。</li> <li>○ 既存の認可外保育施設に対して公費を投入し、質の向上を図ることにより、待機児童を解消することができる。</li> </ul>

【労使関係団体】			
団体名	幼保一体化等	サービス・給付体系	制度体系（国と地方、財政等）
○日本経済団体連合会	<p>＜幼保一体化＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「幼保一体化」については、幼稚園・保育所のそれぞれの基盤の上に保育・教育機能を付加し、教育と保育を一体的に推進することとし、まずは認定こども園設置拡大に向け、手続きや運営費補助などの普及阻害要因を解消すべきである。</li> <li>○ 「一体化」が必要な根拠や財源についての議論が不足しているのではないか。</li> </ul>	<p>＜保育制度改革等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 多様で柔軟なサービスの拡充に向け保育分野における株式会社やＮＰＯの参入を促進。初期投資の負担軽減を行うとともに、社会福祉法人会計による財務規制、事実上の配当規制等を撤廃すべきである。</li> <li>○ 保育士資格制度の見直し、新卒に限らない有資格者の掘り起こし、無資格でも経験者を活用するなど、保育の担い手を確保すべきである。</li> </ul>	<p>＜子育て支援制度のあり方＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国、地方、労使団体、保育利用者等が参画する「子育て会議（仮称）」を内閣府に設置し、子育て支援関連予算の「みえる化」を図るとともに、重点施策や予算編成の基本方針を策定し、執行状況を確認する仕組みを提案する。</li> <li>○ 基金方式については、それを管理する組織も必要となり、行政の肥大化を招くこととならないかという懸念がある。</li> </ul> <p>＜財源等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 経済活力を維持しつつ、子育て支援や社会保障の持続可能性を確保するには、全国民で支える消費税を中心に安定財源を確保すべきである。</li> <li>○ 保育サービスは公費対応が基本。企業が一定負担するには①拠出目的と給付内容の整合性が図られること、②給付の規模、対象、内容への意見反映が可能であること、③拠出の規模、仕組み、中長期の負担見通しが明らかであることが必要不可欠である。</li> <li>○ 「地域主権」改革の流れと整合性を図りながら、地方自治体に確実に予算を配分し、地域実情にあわせて創意工夫できる仕組みが必要である。</li> </ul>
○日本商工会議所	<p>＜幼保一体化＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 幼保一元化（保育士と幼稚園教諭の制度を含む）を推進するとともに、待機児童対策に幼稚園の資源を活用する。認定こども園は経過的であり、将来的には幼保一元化をすべき。</li> </ul>	<p>＜保育制度改革等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 一時預かり等の多様な保育ニーズに対応し、すべての子育て世帯が保育サービスを受けられるよう、「保育に欠ける要件」の見直し（廃止）をする。</li> <li>○ 地域の実情に応じて子育て世帯のニーズが解決できるように、地方自治体へ権限移譲をするとともに、新規参入や既存事業者のサービス拡充を妨げないよう、認可の客観化、規制緩和をあわせて行う。</li> </ul>	<p>＜財源の確保等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 少子化対策予算を対ＧＤＰ比２％程度まで増額することが必要。その際、現金給付よりは保育所整備などのサービス拡充に予算を優先配分すべきである。</li> <li>○ 現行の事業主負担を財源とする児童育成事業費は①給付と負担の対応がとれていない、②給付に対する考え方が不明瞭、③事業主との協議の場がないなどの問題があるとともに、日本企業の７割は各種手当を支給して子育て世帯の従業員を支援しているところである。これ以上の事業主負担を求めるべきではない。</li> </ul>
○日本労働組合総連合会	<p>＜幼保一体化＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「幼保一体化」については、当面は認定こども園、とりわけ幼保連携型の普及環境の整備が現実的ではないか。</li> </ul> <p>＜子ども家庭省（仮称）＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 安定財源の確保と財源の統合により、子ども・子育て政策を総合化・体系化する必要がある。将来的には「子ども家庭省（仮称）」を展望する。</li> </ul>	<p>＜保育制度改革等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「保育が必要な」子どもに例外なく保育サービスの利用を保障し、市区町村の実施責務を法制度上明示することが必要。</li> <li>○ 人材不足改善のためにも保育士の処遇改善が必要。運営費の使途制限は人材確保とサービスの質の向上に不可欠。</li> <li>○ 放課後児童クラブについては、事業の位置付け・基準を検討し、早急に制度化するべき。また、指導員の待遇改善と人材確保等のために必要な手当をすべき。</li> </ul>	<p>＜子育て支援制度のあり方＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 財源の統合、ステークホルダー参画による総合的な政策プロセスへの関与を前提とし、国が最低基準を定め、安定的財源を保障し、市区町村においてその財源が確実に子ども・子育てサービスに回る仕組みが必要（「子育て基金（仮称）」構想）。</li> </ul> <p>＜現物サービスの重要性＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 日本はＯＥＣＤ諸国の中でも、子ども・子育て支援費用の対ＧＤＰ費が少ない。ＯＥＣＤ並の対ＧＤＰ比率に引き上げていくべき。</li> <li>○ 一般財源化は、子ども・子育てにかかる財源が地域における子ども・子育て施策に使われているか不透明になる。</li> <li>○ 子ども手当は国庫負担を基本とすべきであるが、少なくとも児童手当の事業主拠出分程度は維持すべき。また、現物給付と現金給付のバランスをとり、当面は基盤整備を優先すべき。</li> </ul>

【地方関係団体】

団体名	幼保一体化等	サービス・給付体系	制度体系（国と地方、財政等）
○全国知事会	<p>＜幼保一体化＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 幼保一体化の検討にあたっては以下の３つの視点が重要である。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ わが国の将来を見据えた教育のあり方からの検討。</li> <li>・ 低年齢児から放課後児童対策までの途切れのない支援を行う観点。</li> <li>・ 経済効率からではなく、子どもの立場に立った検討。</li> </ul> </li> </ul> <p>＜子ども家庭省（仮称）＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 子ども関連施策を総合的・一元的に行う省庁の設置が必要。一部都道府県（秋田県・高知県等）では既に幼保の一元的所管を行っているところがある。</li> </ul>	<p>＜保育制度改革等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 保育、幼児教育については、基礎的自治体を実施主体とすることが適当であるが、都道府県の役割等についても議論していきたい。</li> </ul>	<p>＜子ども手当について＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 全国一律で行う現金給付については国でその財源を負担すべきであり、保育のようなサービスは地方が創意工夫により取り組む仕組みとすべき。</li> <li>○ 現金給付と現物給付のバランスが必要であるほか、国の責任において必要な財源の確保を図るべき。</li> </ul> <p>＜子育て支援制度のあり方＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ フランスの家族手当金庫のようなものをつくっても、信頼性を保てるのか疑問である。</li> </ul>
○全国市長会	<p>＜幼保一体化＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 市立のこども園が認定を受けないのは、認定をうけることのメリットがないため。制度を広げていくなれば、財源等のメリットがある制度にすることが必要。</li> <li>○ こども園化しても幼稚園と保育所の利用料の違い、預かり時間の長短の差など、幼保の制度の違いによる問題は依然として解消されていない。</li> </ul> <p>＜子ども家庭省（仮称）＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生涯学習の繋がりを断絶しない横軸的な対応として、就学前の時期についてはすべて「子ども家庭省（仮称）」が所管するなどの形がとれないか。</li> </ul>	<p>＜保育制度改革等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 保育所の待機児童の問題については、幼稚園における児童の受け入れを「２歳以上」とすることにより効果的な解決策がとれるのではないか。</li> </ul>	<p>＜国と地方の役割等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地方分権にあたり、幼稚園・保育所の許認可権を地方（市町村）に移すべき。保育、幼児教育については、基礎的自治体に任せてもらえれば、都道府県の関与は必要ないのではないか。</li> <li>○ 基金方式については、財源についての懸念がある。</li> </ul> <p>＜子ども手当について＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 子ども手当については、保育料・給食費等の滞納分を市町村において相殺できる制度としてほしい。</li> </ul>
○全国町村会	<p>＜幼保一体化＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 観念的、理念的な「幼保一体化」ではなく、具体的な財政支援の裏付けがなければ現実には動かないのではないか。</li> <li>○ 幼保一体化は大事だが、都市部では待機児童の問題、地方では少子化による定員割れの問題がある。地域の実情に応じた柔軟な運用ができる制度にするべき。</li> </ul>	<p>＜公立保育所の運営費＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 公立保育所の運営費が一般財源化して交付金が減った。財源的な裏付けがなければ子どもたちのための教育・保育サービスの質が確保できないのではないか。</li> </ul>	<p>＜国と地方の役割等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 保育・幼児教育については基礎自治体に任せてもらえれば都道府県の関与は必要ないのではないか。</li> <li>○ 基金方式については、市町村に設ける場合、町村には小さな額しか入らず、不利になるのではないか。</li> </ul>